國語

第四学年　中

50522
教科書文庫
5
810
34.1947
0/304
49616

國語

第四学年　中

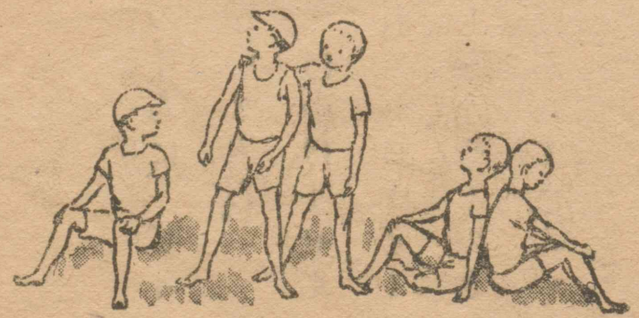
広島大学図書
0130449616

中央図書館

もくろく

一　うちのほおじろ……四
二　あぶらぜみ……十四
　（一）
　（二）
三　天の川……二十六
　（一）
　（二）
四　幸福……三十七

こがねひめ
一まいのシャツ
幸福
五　みはらし台……五十六
六　みにくいあひるの子……六十
　（一）
　（二）
　（三）
　（四）
七　いねを育てて……九十四



一　うちのほおじろ

ちょうど十年ほどまえ、私のうちに、ピオという、うちじゅうの人氣者がいました。

西洋の子どもだろうなどと、早がってんしてはいけません。いぬでもねこでもありません。鳥――それも、日本どくとくの、北はほっかいどうから、南はきゅうしゅうやそのさきの島々まで、いたるところの山野に、いちばんたくさんいる鳥といわれるほおじろです。

どうして、ピオが私のうちにかわれるようになったかとい

えば……。

秋のはじめのある晩、一家そろって、ぎんざの大通りを歩いていましたら、あるデパートのまえのうすくらがりに、大ぜい人が立っているので、なんだろうとのぞいてみると、ひとりの小鳥屋が、夜店をひろげていました。

小鳥屋というより、ほおじろ屋といったほうがいいかもしれません。なぜなら、ほおじろだけしか賣っていなかったのですから……。それがまたとくべつで、そばにすえた小さなかごの中から、一わずつつかみだしては指さきへとまらせたり、かたへ乗せたり、てのひらで遊ばせたり、口さきにふくんだえさをとらせたり――そのめずらしさ、おもしろさに、

黒山の人だかりだったのです。

私も、すっかりひきこまれて、しばらく見物したのち、その一わを買い、小さなボールばこにいれてもらって、だいじに持って帰りました。その晩から家族のひとりになり、あくる日、ピオという名がつけられました。

だんだんなれて、指さきへもかたへもとまるようになったばかりか、頭の上にも乗り、口さきのめしつぶもつっつくようになりました。それどころか、自分から指さきやくちびるへとびあがり、とびついて、じょうずにえさをとったり、「ピオ」。とよんでひざをたたくと、ひざの上にとび乗ったり、三ど三どの食事に、テーブルの上でおしょうばんしたりしました。

客がきているときなど、あまりテーブルの上でぎょうぎのわるいまねをすると、

「これ。」

としかったり、それでもきかなければ、指で追ったりしました。すると、だんだんあとずさりして、うしろに氣づかず、テーブルのはしからころげ落ちたりしました。

朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しいものです。まるで、一日の幸福を予言してくれるようです。思わずおきだして、

「ピオ、いい声だなあ、おまえは。」

とほめたり、なでてやったり、

「どこの生まれだい。」

と、きいてみたりするのです。

「どこ。」というのは、同じ日本の中でも、土地土地でほおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。たとえば、「いっぴつけいじょう」と歌ったり、「ツンツンつっころばし」とさえずったり——

それは、鳴きかたのちがいではなく、ききかたのちがいだろうと思う人もありましょうが、そればかりでなく、ほおじろ自身、國々のなまりのようなことばをもっているのだそうです。なんとりこうな、土地にかんけいのふかい鳥だろうと、それを知ってから、よけいにピオがすきになりました。

ピオのほうでも、その氣になったらしく、ときたまそとのろじへだしてやっても、すぐまいもどってきます。ろじどころか、庭の木にとまらせても長くはいません。私たちの家のうち、中でも茶のまほど、すきな、安心なところはないというように——庭さきにいるとき、とつぜん、上へ飛行機でもとんでくると、そのあわてかたといったらありません。びっくりして茶のまへにげこみ、そこにすわっている私のひざのあいだにもぐったり頭をつっこんだりします。

といえば、いかにもおくびょうもののようにも思えましょうが、どうして、一方では、とてもむてっぽうなきかんぼうでした。たとえば、近所のねこやのらねこが通りかかっても、

にげるどころか、向かっていこうとさえするのです。うちの中にいるかぎり、こわいもの知らずで、なにか氣にいらなかったりおこったりすると、赤い口をあけて、私たちをおどしたりかんだりします。そのかっこうは、さるそっくりです。また、どうかすると、歩いているとき、追いかけてきて、かかとや足の指をつっついたりするのです。

ピオのゆうかんさや、りこうさや、ちゃめぶりや、おかしさなどは、まだいくら書いても書ききれません。小さな家で、小さなかっこうをしていながら、毎日なにかかわったことをしでかしては、みんなをおどろかせたり感心させたりします。

ところが、ある土曜の午後、おなかをすかして学校から帰ってきたすえの女の子が、茶のまのドアをあけて、ひょいとふみこんだとたん、うちがわでむじゃきに遊んでいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

「あっ。」

と　女の子ばかりでなく、茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、いそいでピオをひろいあげました。すると、あわれにも、くちばしから血をだして、目さえあけたりとじたりして、からだをふるわせてもう虫の息です。

「ピオや、ピオちゃん。」

みんなあわてて、口々によんで、元氣づけるやら、くすりをのませるやら、あたためるやら——あらゆる手あてをつく

しましたが、それなり、まもなく息をひきとりました。

みんなないて――ことに、すえの女の子などは、目をなきはらしましたが、もうどうすることもできませんから、つめたくなったからだをわたにつつんで、小ばこにいれて、庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。そうして、「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを立ててやりました。

かわいいものをなくしたばかりでなく、私は、ピオの信頼

をうらぎったのが、かなしくてなりませんでした。ころしたのは、もちろんあやまちですが、でも、信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなさけなさは、いいようのないものでした。

それから十年、いまも、私はピオのことがわすれられません。ことに、町はずれの野原を歩いたりいなかのしものふかい朝の野にでたとき、「チロリン。」だの、「チイチイチン。」だのと鳴いているほおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、思わずなみだぐみます。

たかが一わの小鳥のことをと、わらわないでください。この思いでは、おそらく一生なくならないでしょう。

二　あぶらぜみ

（一）

夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。

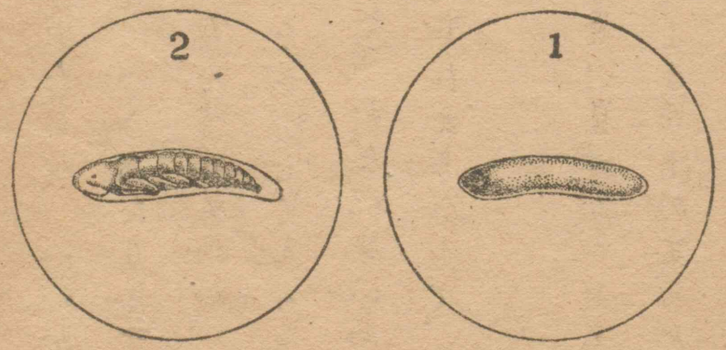
親ぜみが、あのほそくとがった口のさきで、かたい皮にあなをあけて、ていねいに生みつけておいてくれましたので、寒い冬もぶじにこすことができました。

春がきても、たまごはそのままでした。暑い夏がやってくると、たまごは、はじめてかえりました。二ミリほどある、白いうじのようなようちゅうが、はいだして、あおぎりのふ

とみきをつたって、地面に向かって、すべったりころがったりしておりていきました。

地面におりた虫たちは、やがて、思い思いにやわらかいところをさがして、地の中にかくれてしまいました。

地の中はどこもまっくらです。せみの子どもたちは、自分の小さなまえ足でトンネルをほりながら、さぐりさぐりもぐっていきます。そこは木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、



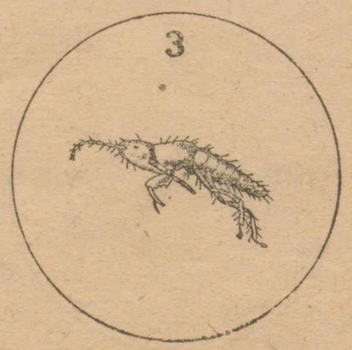
かさなりあってはえています。あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木の根ものびています。だから、虫たちが、いいかげんにすすんでいっても、なにかの木の根にいきあたります。

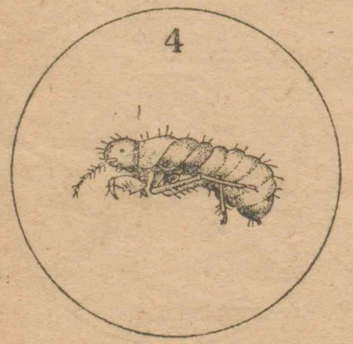
しかし、虫たちは、においで知るのか、なんで知るのか、手ごろな、皮のうすい、しるの多い木の根をさがしてあるきます。虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口をもっています。その口のさきを根の中につきさして、木のしるをすいはじめます。

これは、木からいうとめいわくしごくなことですが、せみの子からいえば、母親のちぶさにすがったようなもので、とりついたがさいご、よういにそれからはなれません。

虫たちは、どうしてこんなことができるのでしょう。それは、だれも教えてくれたことではありません。人間のあかんぼが、したのさきをじょうずにつかってちちをのむのと同じように、しぜんにそなわったかしこさで、これでじょうずに生きていくのです。

虫は、はじめは、白い、よわよわしいうじのようなかたちをしていますが、大きくなるにつれて、六本の足がだんだん強くなり、ことにまえ足は、いつ

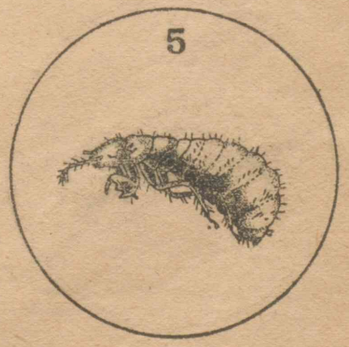


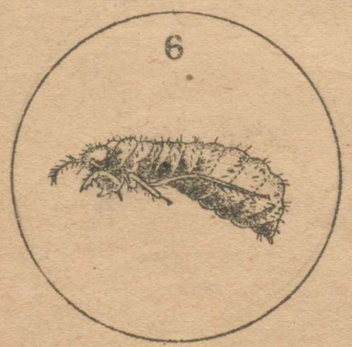


もトンネルをほるのにつかいますから、たいへんかたく、じょうぶになります。

土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、トンネルをほっていかなくてはなりません。それでたいそうほねがおれて、このうえなくふべんですが、そのかわり、親たちの大てきのすずめもねこもやってこないから、安全です。

同じ地中に住むものでも、こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、つみごえやこえ土の中に生みつけられて、

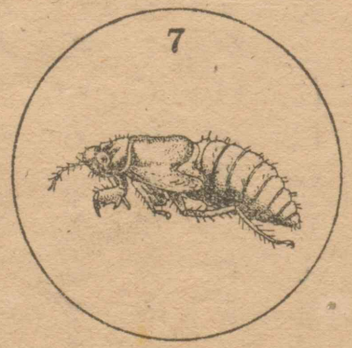


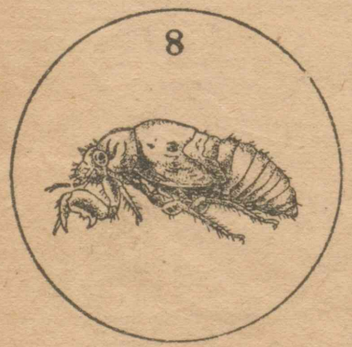


わずか二三ヶ月で大きくなって、皮をぬぎかえて地の上へでていきます。

しかし、ほそいくだのさきから、木の根のしるをわずかずつすっているせみの子たちは、たいへん生長がおそくて、よういに大きくなりません。あぶらぜみでは、七年もかからないと、親になることができないといいます。なんという氣長なことでしょう。

せみの子たちは、はじめにはあさいところにいて、ほそい木の根のしるを





すっていますが、大きくなるにつれて、だんだん地のそこふかくもぐりこんでいきます。

七年の月日がたったころ、せみの子たちは、れいのふしぎなかしこさで、もう大きくなりきったことを知ります。そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をまつのです。

上からつたわってくるあたたかさと、かわきかたとで、いまが夏だということや、よい天氣がつづいていることなどを知ります。せみの子は、だいたんに、まっすぐなあなを地表に向けてほっていき、あたりのくらくなりかけた夕ぐれをみはからって、思いきって土をかきわけて地上にはいだします。

（二）

あめ色をした六本足の虫が、こしを高くして、ひょっくりひょっくり歩いていくのは、ほんとうにおかしなものです。皮がこわばっていて不自由だし、目もよくはみえないらしいので、ねこや、すずめにみつけられたらたいへんです。

地上には、一本のささだけがはえていました。せみは、さっそく、ぶさいくなかっこうをして、それにはいあがっていきました。地表から一メートルほどのぼったところに、小枝がわかれていました。

虫は、それにとりつくと、まえ足のつめでかたくそれにし

がみついて、動かなくなってしまいました。

もうすっかりくらくなりました。あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、われめができました。すると、中から、みずみずしい、やわらかい、せみのからだがはみだしてきました。せなかがでます。頭がでます。羽がぶらりとさがりました。足もでました。ただ、腹の下のほうだけが皮にかくれています。

虫はぐっとそり返るようにして、頭をうしろにさげました。しばらくそのままのしせいで動きません。やがておきなおったかと思うと、からだはすっかり皮からはなれていました。

みるまに、羽はすらりとのび、からだの色もこくなっていきます。

虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれしそうです。

朝日が山の上にのぼって、明かるい光がさっとさすころになると、せみの羽は、ぶるぶるとふるえて、色も、もようも、はっきりとしてきます。黒いところは黒く、茶色のところは茶色になって、いかにもあぶらぜみらしくなります。

しばらくすると、れいのあおぎりの木でも、ほかのあぶらぜみが「ジージー、ジージー」。と鳴きはじめました。このわかいあぶらぜみは、きゅうに元氣になって、そろそろと歩きだしました。はばたきをして、すっととびたったかと思うと、その鳴いているなかまのそばへ、とんでいってとまりました。

そこへなかまが集まってきて、にぎやかな音樂会のようになりました。

やがて死ぬけしきはみえずせみの声

と、むかしの人がうたっていますが、そのとおり、死ぬことなど考えられないほどにぎやかに鳴きたてたせみも、やがて、秋になると、みんな死んでしまって、あたりもひっそりとしずかになります。

せみの死がいは、ありたちがよってたかってひいていきますが、あのぬけがらだけは、いつまでもささだけにかたくすがりついています。

三　天の川

（一）

たまでかざった、きれいな四頭びきの馬車が走ってきます。中には天帝が乗っておいでです。

馬車は、七色の大きなそり橋を音もなく渡って、草花のききみちている野原へおりてきました。

そこには、星のかんむりをつけたむすめたちが、楽しげに歌ったり、花つみをしたりして遊んでいました。天帝は、あたりをみまわして、なにかさがすようになさいました。それは、天帝のひとりむすめのはたおりひめのすがたを、もとめておいでになるのでした。けれども、みあたりませんでした。馬車はふたたび走

りだして、草原をよこぎっていってしまいました。

やがて、大きな天の川にさしかかりました。川の水は銀色に光り、はくちょうがしずかにういていました。川岸にそって車を走らせていくと、林の中にごてんがあって、中から、はたをおる音がひびいてきます。天帝は、そっとごてんの中へおはいりになりました。すると、さがしていたはたおりひめが、いっしんにはたをおっていました。そのおり物の美しい光に、天帝もすっかりおみとれになりました。ひめは、なにも知らずにおりつづけました。

「ほかのむすめたちは、野原で遊んでいるのに、うちのむすめは、こうしてはたらきつづけているのは感心なことだ。

むすめのために、りっぱなむこをさがしてやろう。」

こうお考えになった天帝は、そのままそとへでて、また馬車を走らせて、天の川の西の岸を通っていらっしゃいました。すると、黒うしにまたがり、ふえをふいてくる、わかい男にであいました。そのすがたといい、その目といい、ふえの音といい、申しぶんのないけだかさがこもっています。

「あなたの名はなんといいますか。」

天帝は、その男にたずねました。

「私は、けんぎゅうというものです。」

「けんぎゅうというのですか。」

「はい。」

天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみようと考えて、黒うしのしっぽのあたりを一つきおつきになりました。黒うしは、おどろいて、大あばれにあばれだしました。けれども、けんぎゅうはおちついて、ふえをふきつづけていました。黒うしは、にわかにかけだし、天の川へ落ちこもうとしましたが、そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をかるくポンポンとたたきました。うしは、うまくふみとどまって、おとなしく草をたべはじめました。けんぎゅうは、やはりふえ

に心をうばわれていました。

天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにもらいました。

ところが、はたおりひめは、あまりうれしいので、はたをおることをわすれてしまいました。けんぎゅうも、はたけにでてはたらかなくなりました。ふたりは、毎日野原で樂しく遊びつづけました。

それをみた天帝は、たいへんおおこりになって、はたおりひめを天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、けんぎゅうを西の岸に帰しておしまいになりました。

はたおりひめは、毎日はたをおりながらなきました。

天帝は、このようすをごらんになって、

「では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。」

とおっしゃいました。

一年の月日がたって、いよいよその日になると、けんぎゅうは、黒うしに乗って、ふえをふいてきました。

ふたりは、天の川で楽しくあうことができました。

(二)

天の川は、なん千なん万という星がかさなりあって、あのように、ぼうっとした銀の川のような光をはなっているようにみえるのです。

この星は、一つ一つがはっきりとみえないのですから、ずいぶん、遠いことがそうぞうされます。

私たちの、ただ「遠い」という考えだけでは、この遠いきょりは、おしはかることはできません。

ふだん、私たちは、メートルという単位を用いてきょりを計りますが、星のきょりになりますと、これでは、もうまに

あいません。そこで、もっと大きな單位をもとにして計りま
す。

それは、「光年」という單位です。一光年は、光が出発してか
ら、一年かかってとどくきょりをさしていいます。光の速度
は、一秒間に地球を七まわり半します。この早さで計算しま
すと、太陽から発した光が、地球にとどくまでには、やく八
分二十秒ばかりかかることになります。

ところが、光のとどく時間ではかると、あの星と地球との
きょりは、二十分や三十分ではありません。五日や二十日で
もありません。五ヶ月や八ヶ月でもありません。「光年」を單位と
して計算しなければならないほど、遠いきょりであります。

さて、空の星は、地球からどのくらいのきょりにあるので
しょう。

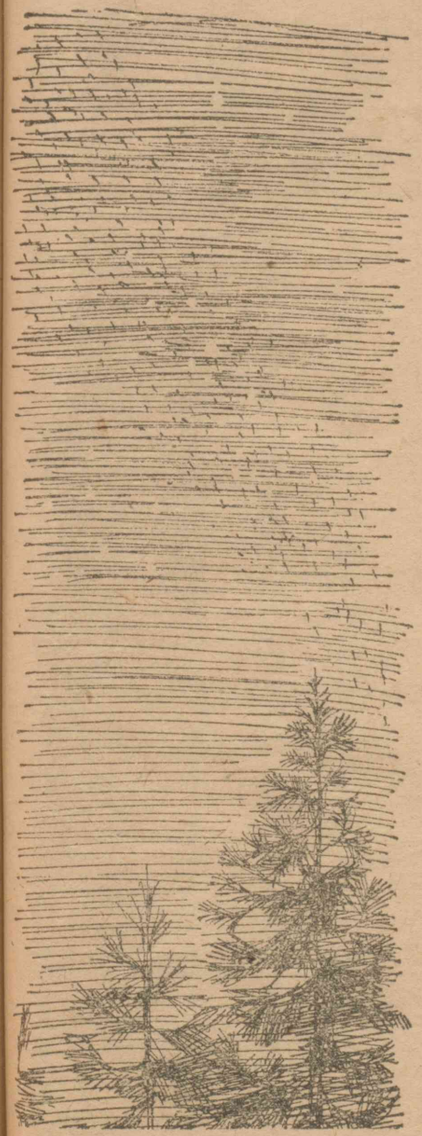
二十光年の星もあり、三十光年の星もありま
す。あのたなばたものがたりのはたおり星は、
二九・五光年ですから、今夜のはたおり星の光
は、やく三十年ほどまえに発した光だというわ
けになります。

このほか、五十光年のところに光っている星があります。
百光年の星もあり、一千光年の星のむれもあり、一万光年の
星もあります。それどころか、十万光年の星もちらばってい
ます。

夜になって天の川をみると、なんともいえない大きなふかい感じにうたれます。

しかも、この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運行しているということです。

このきそく正しいちつじょは、いったいどうしてたもたれているのでしょう。



四　幸福

こがねひめ

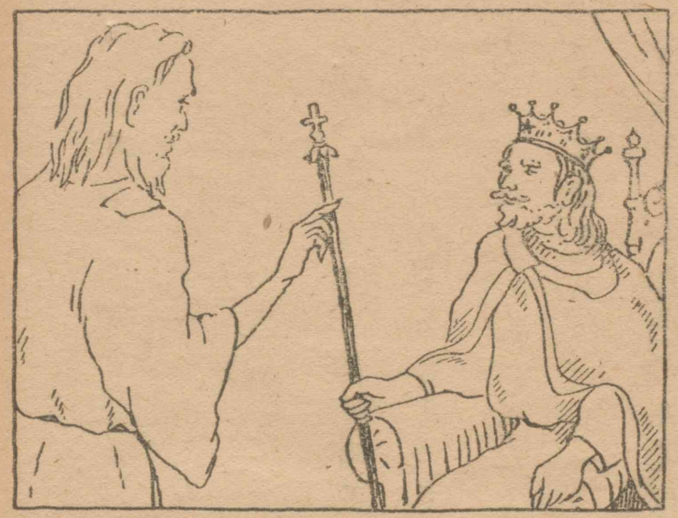
あるところに、金持の王さまがいらっしゃいました。かわいいひとりの王女もあって、なにひとつ不足なことはありませんでしたが、もっとたくさんこがねを集めようと願っていでになりました。

王女がこがね色のたんぽぽをつんでくると、王さまは、

「この花が、みたとおりのこがねならば、わしもつむのだが。」

とおっしゃいました。

ある日、王さまは、宝ぐらの中で、宝物をかぞえておいでになると、み知らぬ人がはいってきました。



「王さま、あなたはお金持ですね」。

と、そのみ知らぬ人がいいました。

「すこしはある。けれども、まだじゅうぶんではない」。

と、お答えになりました。

「まだ満足ではないというのですか」。

「そのとおり」。

「どうすれば満足なさるのですか」。

「わたしの手にさわったものが、みんなこがねになったら」。

「そうですか。たしかにそうですか」。

「自分は、それ以上の幸福は願わない」。

「では、その願いどおりにしてあげましょう」。

「ほんとうか」。

「あすの朝から、たしかにそのようになるでしょう」。

み知らぬ人は、そのままどこかへいってしまいました。

あくる朝になりました。王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、まず、いすにおさわりになりました。いすはたち

まちこがねにかわりました。

王さまは、ねどこにおさわりになりました。それもこがねになりました。着物を着ようとなさいました。着物もこがねになりました。

王さまは、庭へおでになりました。

「さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん美しい庭をもつことができる。」

こんなひとりごとをおっしゃって、そこらの木の葉や花にみんな手をおふれになりました。庭の草木は、みているうちに、ぴかぴかと光ったこがねになっていきました。

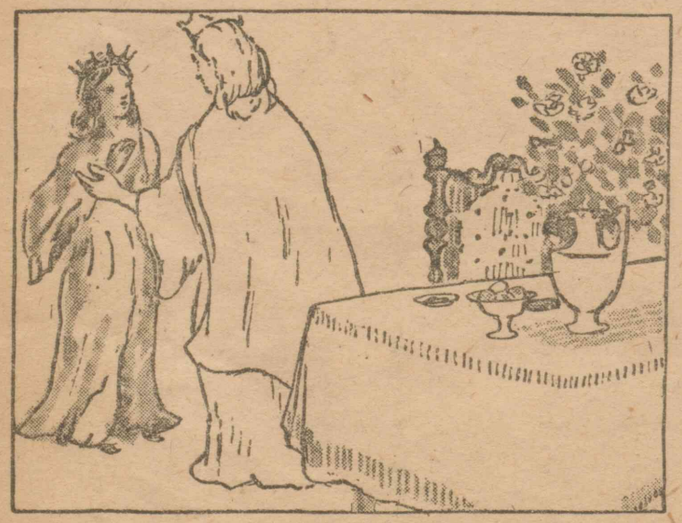
王さまは、朝ごはんをめしあがろうとなさいました。まず

コーヒーをおのみになろうとすると、コーヒーはこがねにかわりました。さかなをめしあがろうとなさると、これもこがねのさかなになりました。たまごをおとりになりました。これもこがねのたまごになりました。

そのとき、王女がはいってきました。

「おとうさま、おはようございます。」

こういって、王さまにだきつきました。



「おお、かわいいひめや。」
とおっしゃいましたが、王女はなんの返事もしません。王女は、かたいこがねになっていたのです。
王さまは、おかなしみになりました。王女は、王さまにとっては、世界じゅうのこがねよりもたいせつであったからです。
「困ったことになってしまった。もし、ひめが生き返るなら、わしはもうこがねなどはいらない。」
そうおっしゃって、おくやみになっていらっしゃると、きのうの、み知らぬ人があらわれました。
「王さま、満足なさいましたか。」
「いや、いや、わたしは、こんなかなしいことはありません。」

「あなたは、こがねと一ぱいの水と、どちらをえらびますか。」
「一ぱいの水です。」
「こがねと一きれのパンとでは。」
「一きれのパンです。」
「こがねと王女は。」
「ああ、かわいいひめです。」
「では、庭のいけの水をすくって、こがねになったものにふりかけなさい。きっともとどおりになるでしょう。」
王さまは、いそいで庭のいけの水をすくって、王女のからだにおふりかけになりました。
「おとうさま。」

王女は、こういって、王さまにすがりつきました。

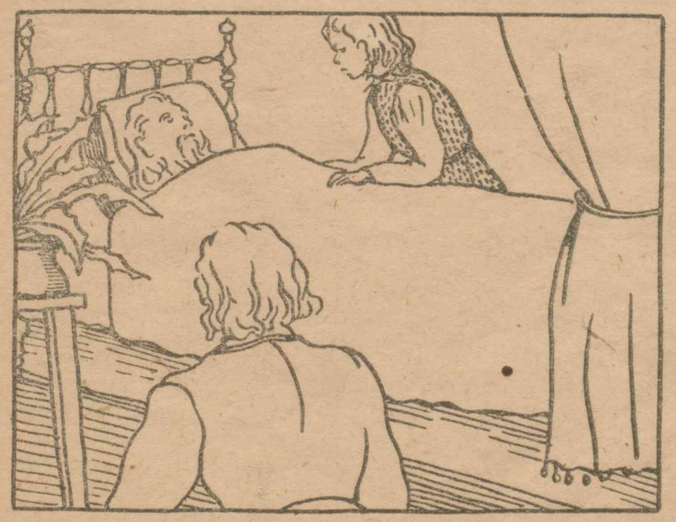
一まいのシャツ

あるところに、ひとりの王さまがいらっしゃいました。

王さまは、ご病氣をなさって、長いことお苦しみになりましたが、いくら手をつくしても、よくおなりになりません。

王さまは、

「わたしの病氣をなおしてくれ



たものには、國の半分をわけてやる」。

というおふれを、おだしになりました。

これをきいて、ちえのある人たちは、みんなより集まって、どうしたら王さまのご病氣をなおすことができるかと、相談をはじめました。けれども、これという考えはでませんでした。

そこへ、王さまの病氣をなおすというものがでてきました。

その人は、こういいました。

「ほんとうに幸福な人をみつけて、その人の着ているシャツを王さまにお着せするのです。そうすればすぐおなおりになります。」

これをきいて、王さまはたいへんお喜びになりました。さっ

そくけらいたちを集めて、

「そのほんとうに幸福なものをさがしてきてほしい。そうして、そのシャツをもらってくるように」。

と、おいいつけになりました。

けらいたちは、あちこちとさがしまわりましたが、ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつかるものではありません。

金持だと思うとからだがよわかったり、からだがじょうぶだとちえがたりなかったり、金もあり、からだもりっぱで、なんの不自由もなくくらしているかと思うと、友だちがいなかったりしました。

けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわりましたが、や

はりみあたりませんでした。

王子も、なんとかして父の病氣をなおしたいと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

どんどん歩いていくと、さびしい村にさしかかりました。日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。

ところが、そまつな一けんの小屋がありました。その小屋のそばを通りかかったときでした。中から人の声がきこえてきます。

王子はふと立ちどまって、その声に耳をかたむけました。

「ああ、せいいっぱいはたらいて、晩ごはんもいただいた。

あとはぐっすりねるばかりだ。ありがたい、ありがたい。世の中にわしより幸福なものはあるまい。ほんとうにわしは幸福ものだ。」

王子は手をうって、

「この人こそ、さがしもとめていた人だ。」

と喜んで、つかつかと小屋の中へはいっていきました。

中には、うすぐらいひが一つともっているだけでした。

ひとりの男が、いまにもごろ

りと横になろうとしているところでした。王子は、いままでのわけをこの男に話しました。

すると、その男は、

「王さまに、さしあげたいことはやまやまですが、わたしには、あいにく、一まいのシャツの持ちあわせもございません。」

と答えました。

幸福

「幸福」が、いろいろな家へたずねていきました。

だれでも幸福のほしくない人はありませんから、どこの家をたずねても、みんな喜んでむかえてくれるにちがいありま

せん。

けれども、それでは人の心がよくわかりません。そこで、「幸福」は、まずしいこじきのようなようなりをしました。だれかがきいたら、自分は「幸福」だといわずに、「びんぼう」だというつもりでした。

そんなまずしいなりをしていても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があったら、その人のところへ幸福をわけておいてくるつもりでした。

この「幸福」が、いろいろな家をたずねていきますと、いぬのかってある家がありました。その家のまえにいって、「幸福」が立ちました。

そこの家の人は、「幸福」がきたとは知りませんから、まずしいこじきのようなものが家のまえにいるのをみて、

「おまえさんはだれですか。」

とたずねました。

「わたしは、『びんぼう』でございます。」

「ああ、『びんぼう』か、『びんぼう』はうちじゃおことわりだ。」

と、そこの家の人は、戸をピシャンとしめてしまいました。

おまけに、そこの家にかってあるいぬが、おそろしい声で追いたてるように鳴きました。

「幸福」は、さっそくごめんをこうむりました。

こんどは、にわとりのいる家のまえへいって立ちました。

そこの家の人も、「幸福」がきたとは知らなかったとみえて、いやなものでも家のまえに立ったように顔をしかめて、

「おまえさんはだれですか。」

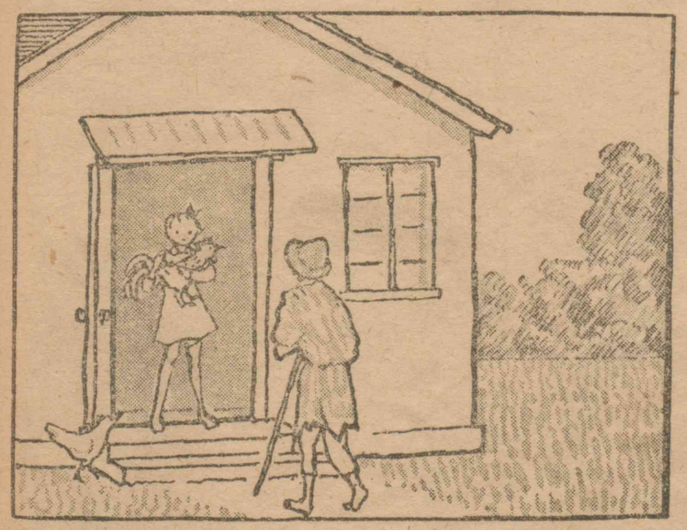
とたずねました。

「わたしは、『びんぼう』でございます。」

「ああ、『びんぼう』か、『びんぼう』はうちじゃたくさんだ。」

と、そこの家の人はふかいため息をつきました。

それから、かってあるにわと



りに氣をつけました。まずしいこじきのようなものがきて、にわとりをぬすんでいきはしないかと思ったのでしょう。

「コッ、コッ、コッ。」

と、そこの家のにわとりは、用心ぶかい声をだして鳴きました。

「幸福」はまた、そこの家でもごめんをこうむりました。

こんどは、うさぎのかってある家のまえへいって立ちました。

「おまえさんはだれですか。」

「わたしは、『びんぼう』でございます。」

「ああ、『びんぼう』か。」

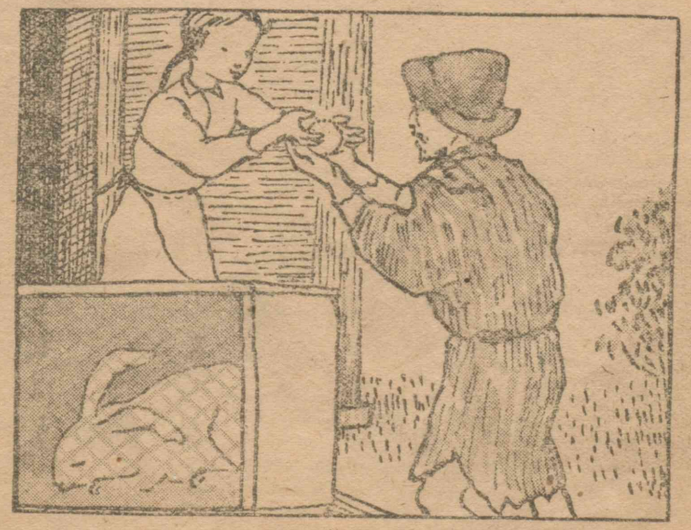
といいましたが、そこの家の人がでてみると、まずしいこじ

きのようなものが、おもてに立っていました。そこの家の人も「幸福」がきたとは知らないようでしたが、なさけのある人とみえて、台所の方からおむすびを一つにぎってきて、

「さあ、これをおあがり。」

といってくれました。黄色なたくあんまで、そのおむすびにそえてくれました。

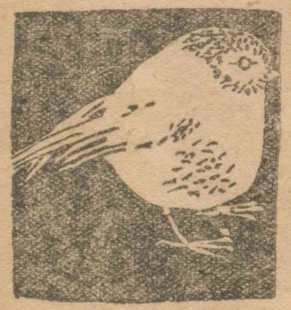
「グウ、グウ、グウ、グウ。」



と、うさぎは、高いびきをかいて、さも楽しそうに寝ねをしていました。

「幸福」には、そこの家の人の心がよくわかりました。おむすび一つ、たくあん一きれにも、人の心のおくは知れるものです。

それをうれしく思って、その家へ、幸福をわけておいてきました。



五　みはらし台

朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎり、美しい砂地がみわたされた。

ぼくは、砂地の上にまっすぐな足あとをつけてみようと思って歩きだした。すこし歩いてからふり返ってみると、足あとが曲がっている。

そこで、向こうにみえるまつの木を目あてにして歩きだした。まえのよりはまっすぐだが、波うちぎわのかもめが目についてて、それに氣をとられて、わきみをしたあたりが横にそれている。

こんどは三どめだ。しっかり目あてをみさだめて歩いてみよう。

五百メートルほどさきに、ひきあげてある小船がある。よし、あれを目じるしにしてやってみよう。小船にいきついて、それにもたれて、いま歩いてきた足あとをみると、みちがえるように、まっすぐな、しっかりした足あとがついている。

ぼくはうちへ帰って、おじいさんにその話をしたら、おじいさんは、

「それはおもしろい。勉強もそのとおりだ。」

とおっしゃった。

ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった。山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしきが目のまえにひらけてくる。いままでのぼってきた方をふり返ってみると、足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺の屋根や停車場が目についた。すると、おもちゃのように小さな汽車が、けむりをはいて走ってくる。みんな手をあげて、「わあっ。」と、汽車によびかけた。

先生は、

「さあ、もう一曲がりだ。みんなその元氣でのぼろう。」

とおっしゃって、さきに立ってお歩きになった。

みはらし台に立ってみると、目のまえに高い山々がそびえて、ずっとつづいている。下をみると、大きな川が遠くへ流

れている。

ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠鏡をのぞいてみた。すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

あの山にのぼったら、もっと大きなけしきがみえるだろう。山の上には、青い空がすきとおるようにすんでいる。

飛行機の上からは、もっともっと大きなけしきがみえるだろうと思った。

そのことを先生に話してみたら、先生は、

「そうだ。高いところにのぼるほど、大きな世界がみえる。」

とおっしゃった。

六　みにくいあひるの子

（一）

いなかは、いいお天氣であった。麦ばたけは黄色く、からすむぎはみどりであった。野原にはかれ草がつみあげられ、こうのとりは、長い赤い足をして歩きまわっていた。

田や野原のまわりには、大きな森があり、森の中には深いみずうみがあった。

みずうみの岸の、ごぼうのはえているところに、一わのあひるがすわっていた。それは、たまごをかえしているのであった。けれども、親あひるは、ひながでてくるまえに、もう

つかれきっていた。それに、たずねてくれるものも少ないし、ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎまわるほうがすきであったからである。

とうとう、一つ一つたまごがわれた。「ピイヨ、ピイヨ」。と、どのたまごからも小さなひなの首がでた。「ガア、ガア」。と親あひるがいうと、ひなたちはすぐとびだしてきた。そうして、みどりの葉の下で、あたりをみまわした。

みどりは目のためにいいから、親あひるはみたいだけみさせてやった。

「世界は廣いものだなあ。」

と、ひなたちはいった。

「これが世界だと思っているのかい。世界は庭の向こうがわまで廣がっているのだよ。さあ、みんなそろったろうね。」

といいながら、親あひるは立ちあがった。

「いや、みんなではない。いちばん大きなたまごがまだのこっている。いつまでかかるのだろう。わたしは、もうほんとうにくたびれた。」

と、ひとりごとをいって、こしをおろした。

「どうだね、どんなふうだね。」

と、たずねてきた年よりのあひるがいった。

「一つのたまごに長くかかるのですよ。なかなかわれないのでね。」

「われないというたまごはどれかね。」

と、年よりのお客さんがいった。

「きっとしちめんちょうのたまごだよ。わたしも、一どそれでだまされたことがあってね、そのひなには苦労したよ。なにしろ、水をこわがるのだから、どんなにしても思い

きってはいるようにしてやることができなかった。わたしは、『クワッ、クワッ。』となったり、『コッ、コッ。』といったりして教えたのだが、だめだった。どれ、たまごをみせてごらん。ははあ、そうだ、そんなものはほっておいて、ほかの子どもに、およぐことを教えてやるがいいよ。」

「でも、もうすこしだいてみましょう。いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできますから。」

「それでは、ごかってに。」

年よりのあひるは、そういって、どこかへいってしまった。

それから二三日して、とうとうその大きなたまごがわれた。

「ピイヨ。ピイヨ。」

と、ひなは鳴いて、はってでた。それは、ひどく大きなからだで、たいへんみにくいものであった。

親あひるは、じっとその子をながめた。

「これはまた、ひどく大きなひなだ。ほかのものは、一わだってこんなすがたをしていない。ほんとうにしちめんちょうのひなかしら。なにしろ、水にいれてやらなければなるまい。」

あくる日はいいお天氣で、太陽は、ごぼうの上をてらしていた。親あひるは、そのひなをみんなつれて、水のところへおりていった。さっと水の中へとびこんだ。

「クワッ、クワッ。」というと、ひなたちも一わずつとびこんだ。

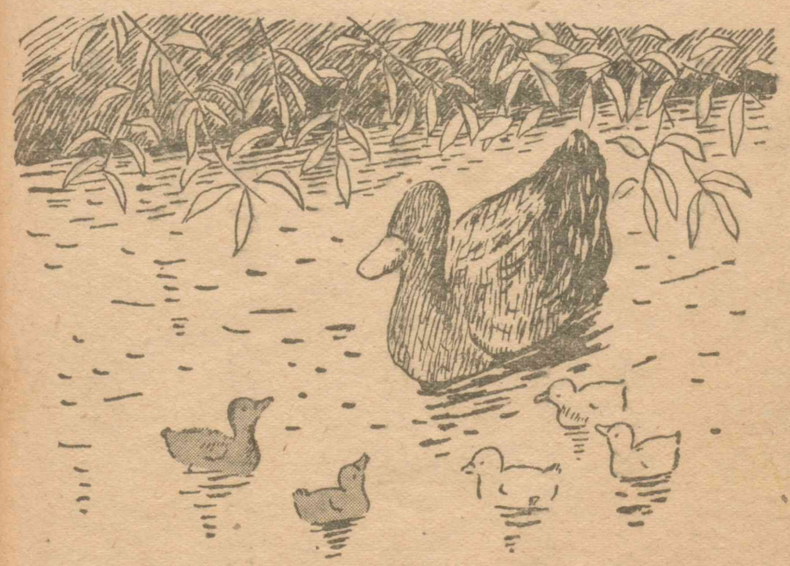
水はひなたちの頭の上を流れたが、すぐにうかびあがってきて、うまくおよいだ。

みにくいあひるの子も、いっしょになっておよいだ。

「いや、しちめんちょうではない。」

と、親あひるはいった。

「あのうまく足をつかうようすや、あのしせいのいいのをみてもわかる。これはわたしの子だ。よくみればきれいな子なのだ。『クワッ、クワッ。』わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていってあげるからね。だが、わたしのそばにくっついてね。人にふまれないように、それからねこに氣をつけてね。」



そこで、みんなは鳥小屋にでかけた。そこには、二つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭のことであらそっていた。そうして、親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、一わの鳥が、

「あれをみるがいい。あそこにいるあひるの子をさ。なんというかっこうだろう。」

というと、もう一わの鳥がとんできて、そのみにくいあひるの子の首すじにかみついた。

「ほっておいてください。だれにもわるいことをしないのですから。」

と、親あひるがいった。

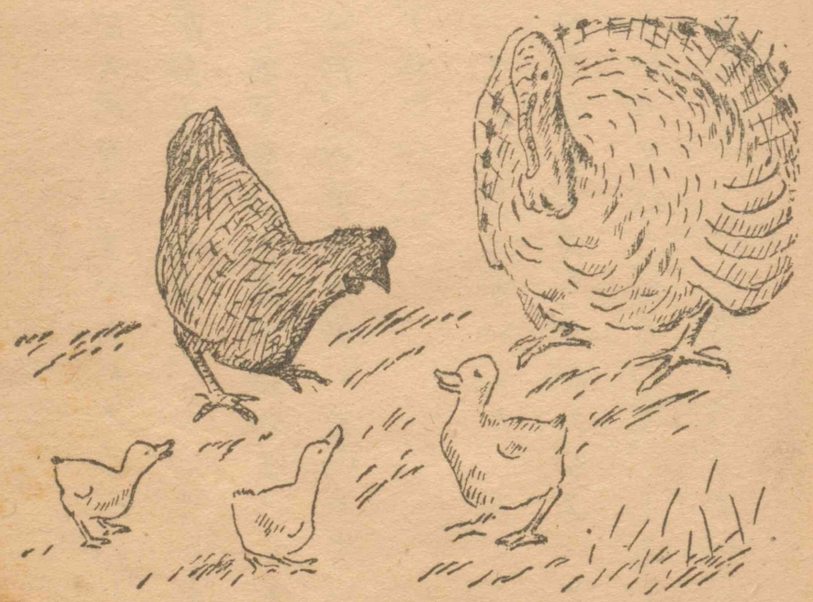
「あんまり大きすぎてみっともないから、かみつきたくなるんだよ。」

年よりのあひるは、

「あの一わをのけたほかは、みんないい子だ。あれだけはしくじったね。」

といった。すると親あひるは、

「あれは美しくはありませんが、たちはほんとうにいいんです。それに、ほかのものと同じようにおよぐし、いや、ほかのものよりうまくおよぐといってもいい。大きくなれば美しくもなるでしょう。たまごの中にあんまり長くいたので、あんなふうになっただけですよ。」



といってかばった。

みにくいあひるの子は、あひるのなかまからわる口をいわれるばかりでなく、にわとりからもぶたれたり、つっつかれたりした。しちめんちょうは、風を受けた船のほのようにからだをふくらませて向かってきた。「ガア、ガア」。といって、顔をまっかにしてやってきた。

あわれなあひるの子は、立っていたほうがいいか、歩いていたほうがいいかさえも、わからなかった。すがたがみっともないばかりに、みんなからしかりとばされるので、しみじみとなさけなく思った。

（二）

それからのちは、わるくなるばかりであった。おしまいには、自分の兄や姉からまで、

「おまえなんかは、ねこにくわれてしまえばいい。」

といわれた。親あひるですら、

「遠いところにいてくれさえすればいい。」

といった。あひるにはかみつかれ、にわとりにはこずきまわされ、えさをくれるむすめには足でけとばされた。

そこで、みにくいあひるの子は、かきねをとびこえてにげだした。すると、草むらにいた小鳥がおそれてとびたった。

「これも自分がみにくいばかりに——」

と、あひるの子は思った。そうして、目をふさいだが、またさきへとんでいった。

こうして、大きなぬまのあるところへやってきた。そこにはかもが住んでいた。あひるの子は、ここで一晩横になった。つかれて、氣がしずんでいた。

朝がた、かもがとびおきた。そうして、新しいなかまをみた。

「おまえさん、おまえさんはずいぶんみにくいね」。

と、かもがいった。

あひるの子は、このあしの中で、横になって休みたいと思った。また、ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、それもゆるしてもらえそうもなかった。

それから二日間、ここにそっとかくれていた。すると、そこへ二わのがんがやってきた。どちらもたまごからはいだしてまもないものであった。

「おい、きみ。」

と、その一わがいった。

「きみはじつにみにくいから、氣にいったよ。どうだ、われわれといっしょにでかけて、渡り鳥になる考えはないかね。きみはみっともないから、いいしあわせにあうかもしれないよ。」

このときである。「ポン、ポン」。と、空で鳴った。そうして二わのがんは、ぬまの中に死んで落ちた。「ポン、ポン」。と、

また鳴った。がんのむれが、そろってあしのあいだからとびたった。また音がひびいた。ものすごい鳥うちがはじまったのである。

かりうどは、ぬまのまわりにまちぶせをしていた。あしの上に廣がっている木の枝にものぼっていた。青いけむりが、くらい木のあいだから雲のようにたちのぼった。

かりいぬが、ピシャ、ピシャとぬま地へはいってきた。あわれなあひるの子はきもをつぶした。頭をねじ曲げてつばさの中にいれた。ところが、ちょうどそのとき、おそろしい大きないぬがそのすぐそばに立っていた。したは口からたれて、目はみにくく光っていた。はなをあひるの子のそばに

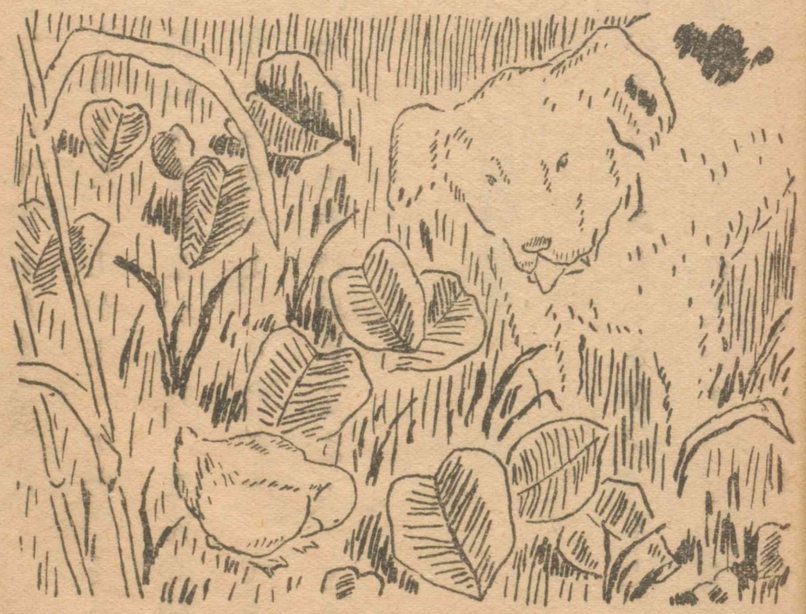
つきつけて歯をむいた。それからピシャ、ピシャと、どこかへいってしまった。

「ああ、ありがたい。」

あひるの子は、ため息をついた。

「自分がみにくいので、いぬもかみつこうとしない。」

しばらく、じっとしずかにしていた。そのあいだも、たまの音はあしのあいだに



鳴りひびき、てっぽうはひきつづいて火ぶたをきった。

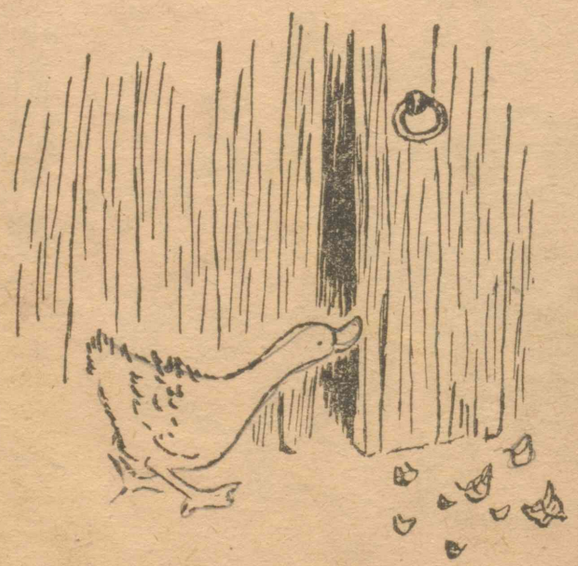
しばらくして、やっとひっそりした。しかし、かわいそうにあひるの子は、おきあがる氣にもなれなかった。なん時間もたってから、ようやくあたりをみまわし、それから、できるだけ早くぬま地をにげていった。田や野原をこえて、どんどん走っていった。

（三）

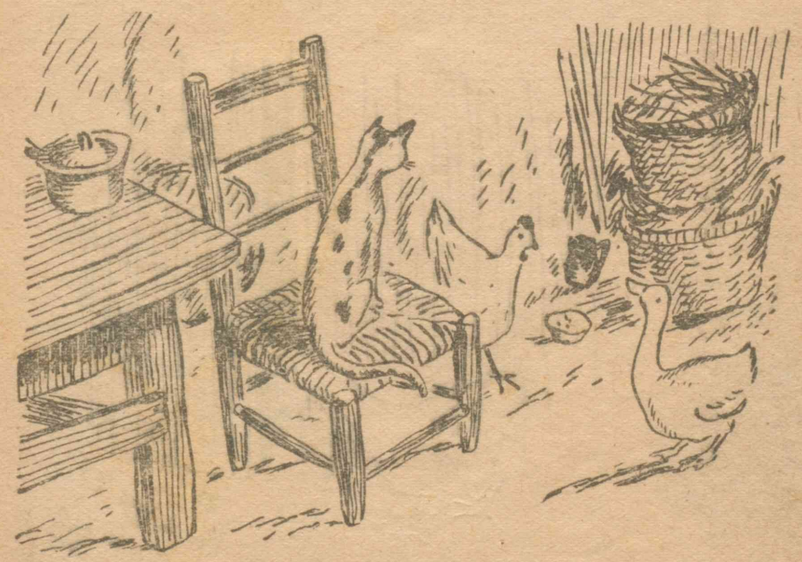
くれがたになって、あひるの子は、ある小さなひゃくしょうの小屋へやってきた。小屋はひどくあれていて、どっちにたおれるかわからなかった。風がひどいので、あひるの子は

立つこともできず、すわりこんでしまわなければならなかった。あらしはますますはげしくなってきた。あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあいているのをみつけたので、そこから中へはいっていった。

中には、おばあさんが、ねことにわとりといっしょに住んでいた。ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだすことさえできた。にわとりは、足はみじかい



が、いいたまごを生んだ。
おばあさんは、それを自分の子のようにかわいがった。
朝になって、よそからきたあひるの子は、すぐにみつけられた。ねこはのどを鳴らし、にわとりは「コッ、コッ」。とさわいだ。
「これは、たいしたもうけものだよ。これからはあひるのたまごもたべられ



る。おすでなければいいが、まあ、かっておいてみよう。」と、おばあさんがいった。
そこで、あひるの子は、三週間ばかりためしにおいてもらった。しかし、たまごは生まなかった。そればかりでなく、ねこやにわとりとはまったくちがった考えをもっていた。
にわとりは、
「おまえさんは、たまごを生むことができるかい。」
と、あひるの子にたずねる。
「いいえ。」
「じゃあ、お願いだから口をださないでほしいね。」
すると、ねこがいう。

「おまえさん、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだしたりすることができるかい。」
「いいえ。」
「それなら、かしこいものたちがものをいっているときに、自分の考えなどはいえないのだよ。」
それで、あひるの子は、すみっこにすわってばかりいた。そこへ、さわやかな空氣と日の光が流れてきた。あひるの子は、きゅうにおよぎたくなったので、にわとりに思わずその話をした。
「おまえさん、なにを考えているの。」
と、にわとりがさけんだ。

「おまえさんは、することがないから、そんなことを考えるのだよ。のどを鳴らすか、たまごを生みなさい。そうすれば、そんなことは考えなくなってしまうよ。」
「でも、水の上をおよぐのは、いい氣持ですからね。それに水の中へもぐってそこへいくと、それはさっぱりしますよ。」
「おまえさん、氣がくるったのだよ。ねこにきいてごらん。水の上をおよいだり、もぐったりするのがいい氣持かどうか。それから、うちのおばあさんにきいてごらん。世界じゅうで、あの人ほどりこうな人はありはしないから。」
「あなたは、私のいっていることがおわかりにならないのです。」

「おまえさんのいうことがわからないって。じゃあ、だれにわかるのかね。わたしのことはいわないとしても、おまえさん、ねこやおばあさんよりかしこいとは思っていないだろうね。うぬぼれてはいけないよ。人がしんせつにしてあげるときは、喜ぶものですよ。あたたかなへやにはいってさ、ものごとを教えてもらえる人たちのなかまいりをしたんだもの。それなのに、おまえさんは口かずが多すぎる。だから、おまえさんとおつきあいするのがいやなのさ。ほんとうですよ。おまえさんのためを思っているのですよ。いやなことをいうようだが、それは、いい友だちはみんなそうしたものだよ。まあ、たまごを生むか、のどを鳴らし

たり、火花をだすことを、せいだして勉強するのだね」

「私は、廣い世界へでたいと思っているのです。」

「どうぞ、かってにおいでよ。」

そこで、あひるの子はでかけていった。そうして、およいだりもぐったりした。けれども、すがたがみっともないので、いろいろな動物たちからのけものあつかいにされた。

（四）

秋がきた。森の木の葉がこがね色や茶色になった。雲は、あられや雪で重くなってひくくたれていた。

ある夕ぐれ、太陽が美しくしずむときであった。草むらか

ら、大きなりっぱな鳥の一むれがやってきた。まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっていた。それははくちょうであった。はくちょうはみごとな羽を廣げ、この寒い國からあたたかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。高く高くのぼっていった。あひるの子は、それをみて、ふしぎな氣持になった。あひるの子は、水の上を車のようにくるくるまわり、その首をはくちょうの方へさしのべ、自分でもおどろくほどへんな大きな声をだした。あひるの子は、あの美しい、しあわせなはくちょうをわすれることはできなかった。そうして、はくちょうたちがみえなくなると、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。

あひるの子は、あの鳥の名も、どこへとんでいったのかということも知らなかった。しかし、いままでにだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。それは、うらやましく思ったのではない。どうして、あの鳥のもっているような美しさをもったらなどと望むことができよう。

そのうちに寒い冬がきた。あひるの子は、水のおもてがすっかりこおってしまわないように、水の中をおよぎまわらなければならなかった。しかし、一晩ごとに、そのおよぎまわるあながだんだん小さくなっていった。あひるの子は、あながこおってしまわないように、いつも足をつかっていなければならなかった。とうとうつかれはてて、こおりの中にとじこ

められたまま、身動きもせずたおれてしまった。

あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかった。あひるの子をみつけて、木ぐつでこおりをくだき、うちへつれて帰った。すると、あひるの子は生き返った。子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、あひるの子はまたいじめられるかと思って、おそろしさのあまり、牛乳なべの中へとびこんだ。たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、おかみさんは手をたたいておこった。そこで、あひるの子は、バターのいれてあるたるの中へとびおり、こんどはまたこなおけにはいってしまった。おかみさんは声をはりあげ、火ばしであひるの子をうった。子どもたちは、あひるの子をつかまえようとして、ころげま

わって、わらったりさけんだりした。おりよく戸があいていたので、あひるの子は、雪の中の草むらへはいりこんだ。

そこで、つかれきって横になっていた。

あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どんなに苦しんだか、ここで話すにはあまりにもかわいそうである。

太陽がてりはじめ、ひばりが歌いだしたとき、あひるの子は、ぬまの草むらの中で横になっていた。美しい春であった。

すると、とつぜん、あひるの子は、つばさをばたつかせることができた。まえより強く空氣をうち、どぶことができた。どうしてこんなになったのかわからないうちに、大きな庭の中にきていた。そこには、たくさんの木がかんばしくにおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上にのびていた。ここは、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあふれていた。

ところが、木のしげみから、二三ばの美しいはくちょうがあらわれてきた。はくちょうは、つばさをサラサラと鳴らし、かるく水の上をおよいでいた。あひるの子は、そのみごとな

鳥を知っていた。そうして、なんだかかなしい思いがこみあげてきた。

「私は、あのけだかい鳥のところへとんでいこう。私のようなみっともないものが、おくめんもなく近づいていくのだから、ころされるかもしれない。しかし、かまわない。なかまに追いかけられたり、にわとりにぶたれたり、女の子につきのけられたり、冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。」

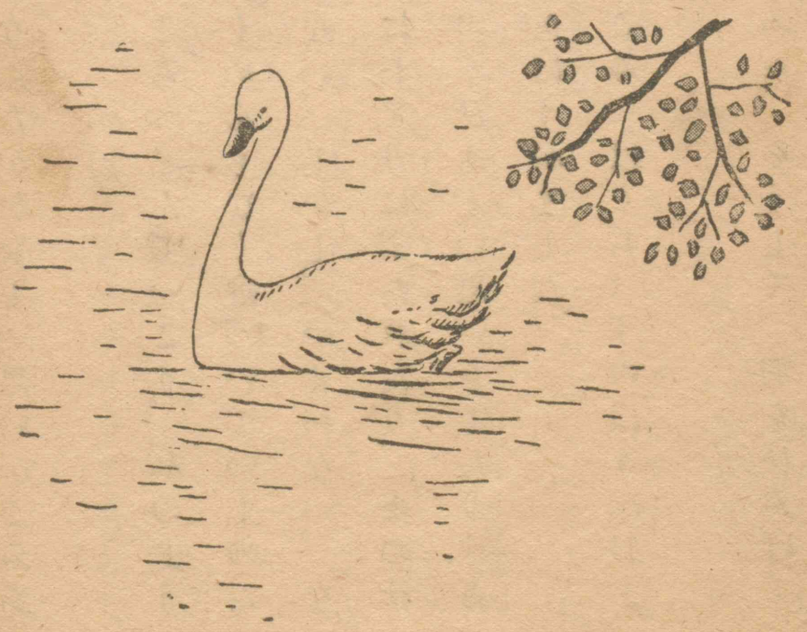
そういって、水の中にとびこみ、はくちょうのほうへおよいでいった。

はくちょうはあひるの子をみた。そうして、羽をひろげて

ゆったりと近づいてきた。

「――」

かわいそうにあひるの子は、ころされるものと思いながら、水の上に頭をたれた。そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのをみた。それは、ぶかっこうなみっともないあひるの子ではなかった。はくちょうであった。



生まれがはくちょうのたまごであってみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。はくちょうは、その受けてきたまずしさとふしあわせとをかえって喜んだ。いまは、その身をとりまくりっぱなものの中に、しみじみと幸福をさとったのである。

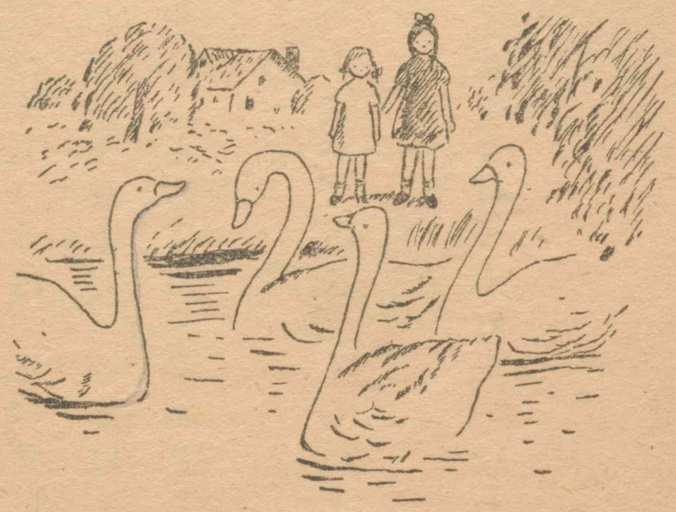
大きなはくちょうたちは、そばへおよいできて、くちばしでかるくなでてくれた。

小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。いちばん小さな子どもが、

「あすこに新しいのがいるよ。」

とさけんだ。すると、ほかの子どもたちも、

「そうだ。新しいのがきた、きた。」
と喜んだ。子どもたちは、手をたたいておどりまわった。おかあさんのところへ走っていって、もらってきたパンやおかしをなげてよこした。みんなは、
「新しいのが、いちばんきれいだ。」
というと、年をとったはくちょうが、新しいはくちょうのまえにきて頭をさげた。新しいはくちょうは、すっかりはにかん



でしまった。どうしていいのかわからないので、つばさの中に頭をかくした。ほんとうに幸福であったが、すこしもいばらなかった。そのむかし、いじめられたり、あざけられたりしたときのことを考えた。それが、いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美しいといわれる身のうえになったのである。にわとこの木でさえ、新しいはくちょうのまえに枝をたれた。太陽はあたたかく、おだやかにてらした。すると、つばさがサラサラと音をたてた。わかいはくちょうは、そのほそ長い首をあげて、心のそこから喜ばしそうにさけんだ。
「私がまだみにくいあひるの子であったとき、こんな幸福があろうなどとは、ゆめにも思わなかった。」

七　いねを育てて

4月27日（金）晴　19度

きょうは、種もみひたしをしました。品種は、あじのよい「農林1ごう」というのだそうです。

やく3.6dlのもみを、水の中にひたしました。ういたもみがあったので、手ですくってみますと、かるいもみともみがらばかりでした。

水をいっぱいいれ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるということです。

5月2日（水）晴　20度

水をとりかえるときにみたら、もみのもとのほうがすこしふくらんでいました。

5月5日（土）雨　15度

もみのもとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。これが、ほんとうにめになるのでしょうか。

5月7日（月）晴　18度

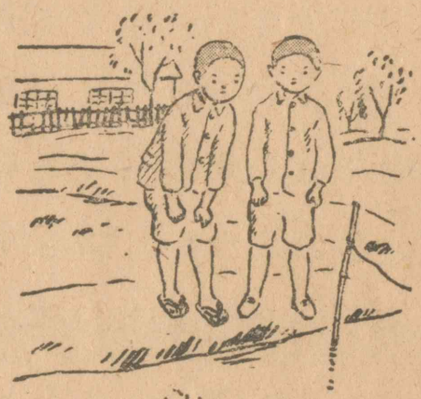
きょうは、お天氣がいいので、もみまきをしました。種もみひたしをしてから　ちょうど10日めでした。はんごとになわしろをきめ、そのさかいにしるしをつけました。土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。水のすむのをまって、むらのないようにまきました。ひたさない種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。いつ、めがでるでしょう。

5月15日（火）晴　20度

種もみから黄みどりのめがでました。ひたさないほうは、まだめがでません。

5月21日（月）くもり　18度

もう、なえが、2cmから3cmにのびました。ひたさない種もみからも、やっとめがでてきました。水にひたしたほうが、1週間早くでました。



6月13日（水）晴　27度

なえが朝風にゆられるようになりました。黄みどりの新しいなえ

が、だんだん育っていきます。どこの田も、たんざくがたにてそろってにきやかです。

6月15日（金）くもり　24度

田植えのころになったので、しろかきをしました。いねがよく根をはって育つように、小石をひろい、土のかたまりをくだいてこまかくしました。種まきのときとちがって、こんどは深くたがやしました。

6月27日（水）晴　28度

いよいよきょうは田植えでしたので、みんなうれしそうでした。よいお天氣で、風もなくあつい日でした。なわしろからとったなえをみんなでわけました。あいだを30cmぐらいずつあけ、きそく正しく植えました。1かぶに3本ずつ植えたのと、1本ずつ植えたのと二とおりにして、くきの数のふえるようすをみることにしました。やく12平方mに150かぶばかり植えました。これから水がきれないように氣をつけましょう。

7月12日（木）晴　28度

どのなえからも、すこしずつ新しいなえがでてきました。これで、もうだいじょうぶでしょう。

7月13日（金）晴　28度

1本のなえのまん中からでた新しい葉が、5cmぐらいになりました。どのなえも生き生きとしています。根が横へはるので、廣いところのほうが育ちがよいと思いました。

7月18日（水）晴　29度

葉と葉のあいだから、新しい葉がたくさんでてきました。新しい葉は、まるまってでてきます。ずっと日でりがつづいたので、水をやるとうれしそうです。

8月7日（火）くもり　25度

みんなで植えたなえが、いきおいよく育っていきます。5かぶをのこして、ほとんど85cmになりました。1本ずつ植えたなえがだいたい7本ぐらいにふえました。3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえましたが、いちばん多いので15本になりました。

8月18日（土）くもりのち雨　25度

いねのほのさきがふくらんで、いまにもほがでそうです。

8月22日（水）晴　28度

いねのほがではじめました。葉のついているもとのところから、黄みどりのほがでました。田植えをした日から、ちょうど60日めです。

9月1日（土）くもり　25度

ほがでそろいました。ほの1つぶを虫めがねでみると、毛のようなものがたくさんはえていました。花のさいているほもみつけました。やくは、白くてにおいもなく目だちません。

9月4日（火）晴　29度

朝、花のようすをみにいきましたら、まださいていませんでした。3時間めの終りに開きはじめましたが、お昼の時間には、もう閉じてしまっていました。花のさくのは、1日にすこしのあいだだけだと思いました。

9月7日（金）雨　26度

きょうは雨降りでした。花は、1日開きませんでした。

9月14日（金）くもり　26度

いねの花のすんだあとをさわってみると、いままでぺしゃんこだったさきが、ふくれてかたくなっていました。二つにわってみたら、中に、青いものがまるくふくらんでいました。これが、きっと実になるのでしょう。

9月21日（金）晴　27度

いねの害虫——いなごが6ぴきほどいました。葉のうらに、青黒いなにかのたまごが生みつけられていました。先生におききしますと、うんかのたまごだということでした。みんなで虫とりをしました。いねは、だんだん黄色くなっていきます。

9月29日（土）くもりのち雨　23度

病氣でせいののびないいねが、5かぶありました。先生におききしたら、このいねは、いもち病という病氣にかかったのだとおっしゃいました。

10月20日（土）晴　22度

どのいねのほも、すっかり黄色になっておじぎをしています。1かぶのくきの数を数えてみますと、大きなかぶは30本

もありました。こんどは1かぶのほの数をみんなでしらべてみました。1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいついていました。3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので16、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。両方をくらべてみて、あまりちがわないことがわかりました。

もみの数をしらべてみました。1本のほに、多いのは180ぐらいずつついていました。ですから、1つぶの種もみから、やく1500つぶももみができたわけです。

10月25日（木）晴　23度

いねかりをしました。いねを根もとからかりとりました。

じょうぶに作ったいねかけに、日がよくあたるようにきちんとかけました。

11月10日（土）晴　19度

いねこきをしました。いねこききかいをつかわずに、手で

いねこきをした人もいました。ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよくとれました。こんどは、もみとごみをわけました。風のくる場所で、目の高さぐらいのところからごみをふきとばさせます。もみをむしろの上にひろげてほしました。

11月15日（木）晴　17度

天氣のよい日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。きょうはもみすりをしました。きかいがないのでくふうしました。いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすってもみがらをはじきました。きれいなお米がでてきました。

11月19日（月）晴のちくもり　18度

のこっていたもみを、1日、日光にかんかんほして、すぐにもみすりをしてみました。どんどんすっていたら、こんどはすぐにはげましたが、くだけた米もでてきました。ほしてすぐ、もみすりをするものではないと思いました。

やく12平方mの土地で、4lのげん米がとれました。平年作は、1平方mに3.5dlのげん米がとれるのですから、これは平年作ということになります。

洋 (4)　言 (7)　万 (33)　陽 (34)　農 (86)　開 (103)

貴 (5)　血 (11)　單 (33)　満 (38)　夫 (86)　閉 (103)

指 (5)　信 (12)　位 (33)　着 (40)　牛 (86)　害 (104)

買 (6)　頼 (12)　速 (34)　横 (49)　乳 (86)

族 (6)　皮 (14)　秒 (34)　寺 (58)　育 (94)

幸 (7)　表 (20)　球 (34)　停 (58)　種 (94)

福 (7)　馬 (26)　算 (34)　少 (61)　植 (98)

予 (7)　帝 (26)　太 (34)　姉 (71)　数 (99)

國語　第四学年　中

Approved by Ministry of Education
(Date May, 31. 1947)

昭和二十二年五月三十一日　翻刻印刷
昭和二十二年七月　五　日　翻刻發行
(昭和二十二年五月三十一日　文部省檢査濟)

著作權所有

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京都北區堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式會社　代表者　井上源之丞

印刷所　東京都北區堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式會社

發行所　東京都北區堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式會社

広島大学図書
0130449616